きめ細やかな支援プログラム

就職大相談会

3年次生にとっては、いよいよ就職活動本番。就職課では「自分の足を使い自信を持って就職活動に臨んでもらいたい。進路決定まで全力をあげてサポートしていくので、就職課を積極的に利用してほしい」と話している。この欄では、1月末から2月に行われたプログラムを紹介する。

▲　オリエンテーションで内定者の自己紹介

3年次生を対象とした就職大相談会が1月29日に生田キャンパスで開かれた。

内定者に就職活動の経験を語ってもらい3年次生の疑問や悩みを解消しようというもので、延べ約330人の3年次生が参加した。4年次生18人が自己紹介した後、各教室に分かれてエントリーシートの書き方や情報の集め方などを具体的に説明し、後輩たちの強力なサポーターとなった。

企業研究講座・地方銀行セミナー

神田キャンパスで

神田キャンパスでは、1月31日から6日間にわたり「企業研究講座」と「地方銀行学内セミナー」が開催された。

両講座合わせて、延べ約3000人が参加。採用担当者に積極的に質問していた（写真左は地方銀行セミナーの様子）。

充実の留学制度 活発な国際交流

本学は、世界16カ国・地域20大学と国際交流協定を結び、学生間で、活発な教育・研究交流を展開しています。夏、春の短期留学プログラム、中期・長期留学制度により、期間、留学先が多種多様な海外留学が可能。そのために必要な留学支援講座をきめ細かく展開しています。キャンパス内では学部、大学院留学生のほか海外協定校から日本語や日本文化、ビジネスを研修中の短期留学生が学び、海外の学生と交流する機会が豊富にあります。

7週間の冬期日本語・日本事情プログラムに29人

国際交流協定校などの留学生が日本語を学ぶ、2011年冬期日本語・日本事情プログラム（期間7週間）が1月7日から始まった。受講生はフランスのリヨン大学、カナダのカルガリー大学など8カ国9大学から29人。1月11日、生田キャンパスでウエルカム・パーティーが開かれ、受講生を専大生や教職員が歓迎した。

日本語学習のほか、川崎市の小学校や企業を訪問するなど体験学習を行う。2月26日まで（リヨン大の学生は3月11日まで）。

長期交換留学生 第1期に7人

2011年度長期交換留学プログラム第1期の派遣留学生に以下の7人が決まった。氏名と留学先は以下のとおり＝敬称略。

●リュミエール・リヨン2）第2大学（フランス）▽染野正和（経済2）▽小林義正（同）▽高橋雄也（文2）

●バルセロナ大学（スペイン）▽岡村真幸（法3）

●ウーロンゴン大学（オーストラリア）▽田中日香里（経済2）▽大山満帆（法3）▽相川和広（商2）

心の〝距離〟縮めた

海外NGO参加学生の写真展開く

▲　左から狐崎教授、岸原さん、奥村さん

昨夏のNGO活動の成果を紹介する写真展が1月中旬、生田キャンパスのアトリウムで開かれた。経済学部国際経済学科の専門科目「NGO論」（狐崎知己教授）を受講し、メキシコ、インドネシア、ネパールなどでNGO活動に参加した学生11人の16作品。現地で接した人々のキラリと光る表情が写し出された。

インドの児童労働問題をテーマにした岸原礼さん（2年次）は、あどけない子どもたちの姿をとらえた。「写真は見るのが好きですが、撮影は難しい。もう一歩踏み込んで撮らなければと思いました」と語った。

奥村麻衣さん（3年次）はカンボジアの保健医療活動について視察。「狐崎先生から『写真を見れば被写体との心の距離が分かる』と教えられ、距離を縮める努力をしました」と振り返った。

『人間はみな同じだ』

日本人のほとんどいない南アフリカに語学留学

潮田　圭司さん（経済4）

優しい人々、青い海

治安は本人の行動次第

▶　山と海に挟まれた都市・ケープタウン

「南アフリカにいながら、世界のさまざまな人と出会えた。宝ものの思い出になりました」

潮田圭司さん（経済4）は、2009年4月から10カ月間、南アフリカ共和国に留学。そこには、親しみやすい人々と目を見張るような青い海が待っていた。ケープタウンの語学学校で英語を学び、「南アの治安は最悪」という日本での情報を打ち破る体験をした。

千葉県木更津市の志学館高校卒。狐崎知己ゼミに入り、発展途上国の経済を学び、留学は、ぜひ実現させたい夢だった。

以前からアフリカに興味を持っていた。ダイヤモンドの不正な取引をめぐって起きる不毛な争いを描いた映画『ブラッド・ダイヤモンド』を見てからだ。アフリカの底知れない闇に衝撃を受けた。

高校時代からサッカーが大好きで、翌年、ワールドカップが開かれる国であることも楽しみだった。

心配だったのは、メディアなどで、南アは治安が非常に悪いと聞いていたこと。両親も心配したという。その背中を押してくれたのは狐崎教授の「南アフリカ？　いい選択だね」という一言。「語学をきちんと身につけるには、日本語を話さない環境がベスト。日本人がいないところがいいという意味だったのです」と潮田さん。

▶　南アの子どもたちと交流する潮田さん（右）

南アの語学学校は予想通り、日本人はほとんどいない。欧州、中東、南米……。アジアは日本以外の国々だった。

ホームステイ先は、イタリア系とアフリカーンス語を話すオランダ系のカップルの家庭。こちらにもいろいろな国からのルームメートがいた。

南アでは、人種によってさまざまな英語が存在する。心がけたのは「間違いを気にしないで、積極的に話をすること」。

ある時、3人称動詞にSを付けずに話すのを聞き、「クイーンズイングリッシュを話すネーティブでも、こんな単純な間違いをするんだ」と驚き、吹っ切れたという。

治安についてはホストファミリーから「旅行者のように地図を持って歩くな。相手の目を見ろ。胸を張って歩け」とアドバイスされた。犯罪に巻き込まれるか否かは自らの行動次第。堂々とした態度の人間は狙われないと分かった。実際、危険な目に遭ったのは携帯電話を盗られた一度だけ。アドバイスを受けてからは一度もない。

▶　さまざまな国の若者と食事を共にしたことも思い出だ

生活していく中で、「この人は○○人だから」というステレオタイプの判断をやめ「人間として」話をするよう心掛けた。すると話が弾み、柔軟な考えをもてるようになったという。

2010年1月帰国。同年の夏休みに再び南アの地を踏んだ。近隣諸国のボツワナ、ナミビアなどを巡り、ヒッチハイクやキャンプもした。山、海、湖、砂漠……行く先々で、見事な自然と心優しい人々に出会った。

就職先はアフリカへ市場開拓する測量機器のメーカーに。英語やアフリカ体験が生かせそうだ。

「行ってみて、じかに感じなければ何も分からない。人間は『根っこ』の部分は世界中みな同じ」――留学で得た潮田さんの、世界観だ。